

Dialogue for People

特定非営利活動法人 Dialogue for People

2019年度 活動報告書

HEADLINE

2019年度各種活動のご報告
Dialogue for People取材地マップ

COLUMN

明日を思い描くことのできる居場所を求めて(シリア・イラク)



世界の「無関心」を「関心」に変える

情報化社会といわれる世の中であって、世界で起きているだけのことを、私たちは知っているでしょうか。取材先で遭遇する『ニュースとして報道されない』出来事、そして現地の人々からの「私たちの声を届けてほしい」という言葉。一つひとつ、一人ひとりとの出会いから、気づかせていただく大切なこと、そしてその中で少しずつ見えてくる世界の現状。

Dialogue for People は、伝える活動の大きな可能性に希望を託し、この一年もまた、みなさんと共に考え、行動していきたいと思えます。



武装勢力同士の抗争により壊滅した村に、少しずつ住民が戻り始めている。(シリア/佐藤慧)



戦火を逃れ、避難生活が続ける中で生まれたロアちゃんの成長が心の支えだという母親のムナさん。(イラク / 佐藤慧)



路上生活を続ける子ども達。スカイボーイと名乗る少年は、空腹の中でもいつも聖書を手放さなかった。(ザンビア / 佐藤慧)

ごあいさつ

未知は希望の源泉にも成り得るもの。
それぞれの役割の中から知恵や経験を分かち合い、
分断や対立を乗り越えていく。



いつもご支援、ご協力ありがとうございます。おかげさまで Dialogue for People (D4P) は立ち上げから第一期を終え、引き続き第二期の活動を行っています。当初は「メディアNPO」という特殊な形態を、どれだけの人にご理解頂けるかと不安もありましたが、ありがたいことに多くの方々の賛同を頂き今に至っています。

より混迷を極める地域紛争や、加速度的に影響を強める気候変動、様々な対立や分断。解決に向けて考えていかなければいけないことは山積みですが、活動を通じて、多くの仲間との出会いにも恵まれてきました。私たちの活動は、決して問題に対する答えを提示するものではなく、みなで未来を考えていくための機会、情報をシェアしていくものです。ひとりの人間には、大きすぎて手が付けられないと思えるような問題でも、それぞれのできることを持ち寄れば、必ず少しずつ変化を起こしていくことができると信じています。

限られた資源や可能性を、奪い合うのではなく、分かち合っていく。その過程で生まれる学びや喜びを大切にしていくことで、きっとより良い共存の知恵を育てていけることなのでしょう。いまだ不安の尽きない世界情勢ですが、そこにある未知は、希望の源泉とも成り得るものです。みなさまと一緒に、今後ともたゆまず歩いていけましたら幸いです。

NPO 法人 Dialogue for People
代表理事 佐藤 慧

About us

Dialogue for People とは

日常から零れ落ちる声なき声に寄り添い
社会課題に光をあてる

Dialogue for People は、写真や文章、映像など様々な表現を通じて、困難や危機に直面する人々の声や社会的課題の渦中にある地域の現状を、ともに同時代を生きる全ての人々に「伝える」ことを主軸として活動するメディア NPO です。どこか遠くの問題に思ってしまう出来事について、誰もが考え自分の役割を見つける機会を創造し、社会課題の解決につながるきっかけを生み出していきます。

Concept

社会課題の
当事者



情報の
受け取り手

...

事業内容


現地取材


執筆・メディア発信


講演会・自主企画


教育プログラム
次世代育成など

世界地図でみる Dialogue for People の活動

この世界地図は Dialogue for People フォトジャーナリストの佐藤慧、安田菜津紀が取材で訪れた地域をまとめたものです。このうち、2019年5月～2020年1月に訪れた場所の一部は写真を用いて紹介しています。

ニュースというものはその名の示す通り、耳目を引きやすい新しい (New) ものごとにスポットライトが当てられることがほとんどです。日本から遠く離れた地での紛争や貧困、差別の問題、そして国内においても、何年も経過し常態化してしまった社会問題や被災地の状況などは、なかなか身近には伝わってきません。もちろん、新たなできごとを伝え、今という時代を考えることも大切ですが、遠く離れているように思えるできごと、実は広い視野から眺めてみると、根底では同じ問題につながっていることが多くあります。

各地のテーマや訪れる頻度は異なりますが、どの地域も時間をかけて人間関係を築き、頂いた思いや言葉を大切に取材を行っています。

- 子ども・教育 学校訪問、青少年交流、児童労働、教育支援など
- 戦争・紛争 国家間、地域間、民族間の争い
- 難民 世界における難民の状況や日本の難民受け入れ
- 人権侵害 人の生命や自由と、それらを脅かすもの
- 貧困・格差 経済的な困窮状態や、ものやサービスへのアクセシビリティの制限など
- 差別 人種・皮膚の色・性・言語・信条・国籍・社会的地位・経済状況等の違いによる不当な扱い
- 災害・防災 自然災害の影響、防災に関する取り組み
- 医療・ケア HIV/AIDS、グリーフケア、心のケアなど
- 平和 戦争・紛争後の社会構築、人々の平和に向けた取り組み
- 政治・経済 選挙、政治・経済体制の転換など
- 女性・ジェンダー 女性のエンパワーメント、性暴力など
- 自然環境 環境問題、生物多様性など
- 文化・スポーツ 音楽やアート、食文化、スポーツ、伝統行事、慣習など



Message

現地協力者の声 - バルザン・サラムさん (イラク)

Natsuki (安田) と Kei (佐藤) は、取材される側の許可なくして写真を撮ることや、勝手に発表することなく、必ず『取材を受ける側の意志』を尊重します。それはとてもプロフェッショナルな姿勢だと思います。地元の人々のことをより良く理解するために、取材に来る前に、現地のことを沢山勉強して来ます。インタビューの最中にも、人々を励まし、勇気づける言葉をかけます。彼らとの仕事は、私にとって最も大切なものです。



各地の取材のテーマと内容

Dialogue for Peopleでは、それぞれの繋がりや個性を生かし、長期的な関係性の中で見えてくる思いや言葉を大切に、取材活動に当たっています。取材は単独で行うものばかりではなく、社会課題の解決に取り組むNGOや団体と協働することもあり、互いの役割を持ち寄ることで、より深く、意義のある活動を行っていきたくと考えています。いずれの取材も、どこかで「終わり」の来るものではありません。境界線を越えた平和な世界の実現に向けて、国や地域にとらわれず、必要と思われる取材を続けていきます。



戦争・紛争／難民

日常を破壊される人々の現状

— SYRIA・IRAQ

抑圧的で残忍な政権、それに対抗する市民たち。シリア、イラクを中心とした中東地域で続く戦争は、そんなわかりやすい構図ではもはや理解できないものとなっています。地政学的メリットや地下資源、イデオロギーの衝突や争いの中で生まれる憎悪。様々な要因が複雑に絡まり合い、今この瞬間も銃弾の飛び交う地域があります。

ひとつ確かなのは、その戦争によって、数えきれないほど多くの人々の日常が破壊されているということです。爆撃により右足を失った8歳の少女、サラちゃんと言います。「“大きい人”が好き勝手するのはもうやめて」。引き続き、市井の人々の言葉を大切に持ち帰ってこようと思います。

災害・防災

復興を模索しながら歩む東北の姿 — JAPAN

東日本大震災から9年という月日が経ちました。未曾有の大災害に襲われた地域は、今も復興の途上にあります。巨大な防潮堤、かさ上げ工事、復興住宅や新居への転居、真新しい商店街。災害の傷跡は目に見え辛いものとなり、世間の関心は年を追うごとに遠のいていきますが、未だに仮設住宅で暮らしている人々や、心に傷を抱えながら生きている人々があります。

外からの目線で復興を語るのではなく、それぞれが明日を向いて生きていける社会をつくっていくこと。それは被災地と呼ばれる場所に限らず、私たちの社会全体のためでもあると思います。



差別／女性／子ども・教育

誰もが自分らしく生きるために — GUATEMALA

グアテマラに限らず、中米には「マチスモ」と呼ばれる男性優位の価値観が根強く残っている地域があります。不安定な治安や経済格差による貧困だけではなく、「女性は学校に行くべきではない」、「男性に従うべきだ」という偏見が、社会を生き辛いものにしています。

そうした状況の中で、国際NGOの協力の下、「自分にも学ぶ権利、自己主張をする権利がある」と気づき、教育や社会参画の輪を広げていく女性たちを取材しました。互いを尊重し合いながら共生を目指す。そんな取り組みが世界のあちこちで始まっています。



貧困・格差

路上から考える幸せな社会の形 — ZAMBIA



いまだ国連の定める「後発発展途上国」の該当国とされながらも、GDPは右肩上がりの推移を続けるザンビア。その経済成長の陰に、置き去りにされているものがあるのではと感じてきました。

この数年、首都ルサカの路上で暮らす子どもの数は急増。多くは家庭内の不和から路上に飛び出してきた子どもたちで、生きる術を知らない彼・彼女たちは、売春やドラッグの売買にのみこまれ、心身共に衰弱していきます。物質的に豊かな日本で問題化する自死も、近年ザンビアでも増えつつあります。幸せな社会の形とはどんなものだろうか。子どもたちの生活改善に取り組む地元のNGOと共に取材を続けています。

戦争・紛争／平和構築／人権

平和への対話を阻む壁 — PALESTINE

2020年1月28日、米トランプ政権は、二国家共存を前提とする中東平和案を公表。しかし、ヨルダン川西岸地区の占領地に作られた入植地のほとんどをイスラエルに組み込む、パレスチナ難民の存在を認めない、パレスチナの非武装化など、極端にイスラエル寄りの内容であり、パレスチナの人々の反発は強まっています。建設され続けている「壁」は両者の溝を広げ、その距離が「壁の向こう側」への恐怖を増長させているように思います。

国際法違反とされる強制的な国境線の書き換えに、第三者である私たちには何が出来るのか。継続的な取材を通じて現地の人々と共に考えていきます。





Column 明日を思い描くことのできる居場所を求めて

戦禍を逃れ避難を続ける中で、新しく生まれたいのち。
故郷を知らないまま育つ子どもたちに、若い母親が願う「居場所」とは—

イラク北部、クルド自治区。IS(過激派勢力“イスラム国”)の勃興など、様々な戦禍に翻弄されながらも、この地は比較的安定した治安を保ってきました。だからこそ、多くの難民や国内避難民の方々が身を寄せる場所となっています。いまだ内戦が続く隣国シリアからも、国境を越え大勢の市民が逃れて来ており、今でも25万人近い人々が、クルド自治区内で避難生活を送っているとされています。

そういった人々が逃れる先は、難民キャンプだけではありません。クルド自治区の首都であるアルビルには、家賃の安い住居を借り、避難生活を送る人々の姿もあります。小さなアパートの一角で、息を潜めるように避難生活を送るマルワさんもその一人でした。彼女の故郷は、とりわけ激戦に見舞われたシリア第二の都市、アレッポです。イラクへ逃れてきたときは、寝る場所もなく、空き

地などにテントを張ったり、廃墟で雨風を凌いだりと、過酷な生活が続いたそうです。

その後、同じくシリアから逃れてきた男性と、わずか15歳で結婚しました。私がマルワさんと出会ったのは彼女が16歳のときです。出産を控え、大きなお腹を抱えながら家事をこなしていました。難民となった家族の中には、不安定な生活を送りながら、若い娘さんが独身でいることによって危険な目に遭うのではないかと心配したり、他の家に嫁がせれば、自分たちが養っていく負担が減るのではと考えたりして、娘たちを早く結婚させてしまうことがあります。しかし早期結婚により、教育の機会などは失われます。高等教育を受けていないマルワさんは、車の洗浄など、身体的に負担の大きい仕事で毎日をつなぐしかありませんでした。

一家は毎晩狭い一室で、身を縮めて眠りにつきます。そのアパートに泊らせてもらった翌日の早朝のことです。「大変、生まれそう!」と、マルワさんはまだ薄暗い道を、タクシーで病院に運ばれていきました。マルワさんは一度流産を経験しています。お医者さんたちは若いマルワさんの体の状態を心配していましたが、到着してから2時間後には、元気な女の子が産まれました。出産までは不安げだったマルワさんも、「この子にいつか、シリアの故郷を見せてあげたい」と、新たな夢が出来たことを語ってくれました。その子には「高貴な女性」を表す、サラという名前がつけられました。

厳しい生活は続きますが、マルワさんの親戚や友人たちは、それぞれ別の場所で避難生活を送っているため、頼ることはできません。限られた家族だけで支え合い、子どもを育てていかなければならないのです。マルワさん一家は、より安全な環境と仕事を求め、各地を転々とするようになります。やがて隣国のトルコへと移ったと連絡があり、一家とはしばらく再会が叶いませんでした。

「アルビルに戻ってきた」とマルワさんたちから再び連絡があったのは、昨年10月末のことでした。同月の初頭には、トルコがシリア北東部へ、その地域を実効支配するクルド人勢力の排除を目的に武力侵攻を行っています。クルド人であるマルワさん一家も、トルコ内で暮らすことに危険を感じ、再びイラク北部のクルド自治区へと戻らざるを得なかったのです。

再びアルビルでの避難生活を始めた一家は、以前にもまして簡易な作りのバラックで寝泊まりをしていました。すでに夜の冷え込みは厳しくなりつつあり、隙間風が堪える季節です。父のヤーセルさんが、ガスの切れたストーブの前で肩を落とし



ながら語ります。「私たちはトルコの田舎で畑を耕しながら、なんとか生き延びてこられました。トルコ人に石ひとつだてて投げたことないのに、なぜ争いに巻き込まれなければならないのでしょうか。この世界に私たちの居場所はもはやないのでしょうか?」。

サラちゃんにいつか、シリアの故郷を見せてあげたいという想いについて、再びマルワさんに尋ねてみました。「帰りたい。でも、存在しない故郷にどうやって戻れというんですか」。マルワさんは哀しそうに呟きました。かつて暮らしていた地域は荒れ果て、情勢も安定しないままです。

トルコで避難生活を続けている間に、マルワさんには二人目の子ども、ナスリンちゃんが生まれていました。本来であれば、新たな命の誕生や子どもたちの成長は喜ばしいことでしょう。けれども、そこに戦禍がある限り、故郷を知らず、将来の夢さえ描くことのできない環境に生きる子どもたちが増えていきます。マルワさんの兄弟たちは、顔をほころばせながら、かわるがわるナスリンちゃんの面倒を見ていました。しかしそんな兄弟たちも、各地を転々とする避難生活の中、学校で教育を受ける機会を逸し続けています。

最低限の衣食住があっても、腰を落ち着けて暮らせる場所や学びの機会がなければ、負の連鎖はどこまでも続いてしまいます。私たちが守っていかねばならないのは、今この瞬間の生活だけではなく、明日を思い描くことのできる、それぞれの「居場所」なのではないでしょうか。

(写真・文：安田菜津紀)

イラク北部クルド人自治区

人口約3千万、「国を持たない最大の民族」と称されるクルド人は、オスマン帝国解体後、トルコ、イラク、イラン、シリア、アルメニアなどの国々の中で、少数民族として暮らすことを強いられてきた。その歴史は困難に満ちており、イラン・イラク戦争末期の6ヵ月半の間に殺されたクルド人は約18万人に上ると言われている。近年もISとの激しい衝突があり、戦争の傷跡は未だ数多く残っている。ISとの戦闘や、近隣諸国の紛争により、現在クルド自治区内で避難生活を強いられているIDP(国内避難民)や難民の数は、150万人を超えると報告されている。一方、数千年に及ぶ豊かな文化、雄大な大地、洗練されたアルビルのモダンな街並みは、多くの日本人のイメージする「イラク」とは違ったものだろう。



さまざまななかたちで「伝える」「届ける」

テクノロジーの進化は、今や地球上のあらゆる人々の手元に、生涯をかけて読み尽くせないほどの情報が届けられる世界をつくりあげました。しかしどのような情報でも、大切なのは「何のために使用するか」ということではないでしょうか。無限とも思える言葉や映像の海から必要な情報を探し出すことは、今後ますます重要になると共に、より困難なものとなっていくでしょう。

Dialogue for Peopleが発信する情報は、決して「答え」を提供するものではありません。ある社会課題があったとき、その解決のために人々を扇動するものでもありません。記事や映像といった情報をひとつのきっかけとし、それぞれの人々がどのような社会を築いていきたいか、「自分自身で考えてみる」ことができれば、というのが私たちの願いです。まったく同じ価値観を持つ人間はひとりとして存在しないでしょう。何かを採択すれば、必ず誰かの意見が無視されてしまいます。そんなとき、一方の声を封じ込めるのではなく、「私はこう考えるけれど、あなたはどう思いますか?」と、対話を続けられる社会風土を育てていくことで、多くの争いは少しずつ穏やかなものになっていくのではないのでしょうか。

写真や文章、映像や参加型イベント。どのような表現にも、伝えられない余白があります。でもその余白を情報の不足と捉えるのではなく、枠の外にある無限の可能性として考えられる、そんな表現、発信を行っていきます。



連載

安田 菜津紀

- ・CAPA(学研プラス)「ドキュメンタリー写真家のメッセージ」(2014年4月～)
- ・考える人(新潮社)「安田菜津紀の写真日記」(2016年4月～)
- ・中日新聞「ほっとライン」(2018年4月～2019年11月)
- ・時事通信社配信「世界で出会った君たち」(2018年4月～)
- ・論座(朝日新聞社)「記憶を宿す故郷の味 - 日本で生きる難民の人々 -」(2018年9月～)
- ・いつでも元気「世界の子どもたち」(2019年4月～)
- ・フォトコン(日本写真企画)「Happy Dialogue」(2019年12月～)
- ・中日新聞「<EYES>」(2020年1月～)

佐藤 慧

- ・信徒の友「生と死の境界線で」(2017年3月～)



レギュラー出演番組

安田 菜津紀

- ・J-WAVE「JAM THE WORLD」
水曜日 ニュース・スーパーバイザー

J-WAVE 81.3FM

- ・TBS テレビ「サンデーモーニング」
コメンテーター (月1回～)



写真展の開催

2019年度は4カ所で写真展を開催しました。このほかにも講演や協力企画にあわせた展示も行いました。写真に映る人々とご覧いただく方々が「出会う」場として、今後ますます展示の機会を増やしていきたいと考えています。

安田 菜津紀・東北スタディツアー参加者

第6回フォトジャーナリスト安田菜津紀と行く
東北スタディツアー 写真展

「高校生が見た被災地の今」

<東京会場>

会場 オリジナルギャラリー東京

期間 2019年11月22日(金)～11月27日(水)

<大阪会場>

会場 オリジナルプラザ大阪 クリエイティブウォール

期間 2020年1月24日(金)～1月30日(木)

点数 33点 (うち安田菜津紀撮影3点)

主催 オリジナル株式会社



撮影：古川隆史

安田 菜津紀

ヒューレおおいた6月特別展

「The Voice of Life 死と、生と」

会場 ヒューレおおいた(人権啓発センター)

期間 2019年6月1日(土)～6月30日(日)

点数 カラー28点

主催 大分市人権啓発センター



撮影：ヒューレおおいた

安田 菜津紀

安田菜津紀 写真展

「世界の子どもたちと出会う」

会場 神奈川県立地球市民かながわプラザ(あーすぶらざ)

期間 2019年10月12日(土)～11月24日(日)

点数 カラー20点

主催 神奈川県立地球市民かながわプラザ

指定管理者：(公社)青年海外協力協会



安田 菜津紀

ヒューレおおいた1月・2月特別展

「この街で、これからも～陸前高田に生きる～」

会場 ヒューレおおいた(人権啓発センター)

期間 2020年1月16日(木)～2月21日(金)

点数 カラー37点

主催 大分市人権啓発センター



撮影：ヒューレおおいた

数字で見る「2019年度 伝える活動」 (法人化後の2019年5月22日～2020年1月31日で換算)



講演

61件



執筆

93件



自社ウェブ記事

50本



出版関連

15件



撮影

16件



YouTube動画

9本

(2019年10月より開始)



出演

52件(回)



インタビュー・対談

24件



イベント開催

6回

※ その他 9件(声明の発表・審査など)

書籍

佐藤慧、安田菜津紀が執筆・翻訳した書籍のうち、2019年に刊行された二冊をご紹介します。



安田菜津紀 著・写真
[協力] 難民支援協会
(2019.11 ポプラ社)

故郷の味は海をこえて 「難民」として日本に生きる

なぜ国を離れなくてはならなかったのか。どうやって日本にたどりついたのか。本書は、日本に暮らす「難民」とよばれる人たちがたどってきた道のりを、故郷の料理に宿された記憶からひもとくノンフィクションです。日本に逃れた難民の方々は、故郷の味からどんな思い出がよみがえるのでしょうか？



ウェンディ・パールマン 著
安田菜津紀・佐藤慧 訳
(2019.11 岩波書店)

シリア 震える橋を渡って 人々は語る

2011年、アサド政権の崩壊を目指して抗議活動に立ち上がったシリアの人々。恐ろしい暴力に晒され、祖国から逃れざるをえなかったにもかかわらず、彼らは今もその夢をあきらめていません。満杯の監獄に押し込められ、誰かの遺体の上で眠るしかなかったと語る男性、シリア人には尊厳などないと嘆く女性……。人々が赤裸々に語ったシリアの現実とは。

声明

事件や問題に対する団体としての意見を、ウェブサイトやSNSを通じて声明として発表しています。

「デイズジャパン検証委員会」報告書を受けて

報道写真の月刊誌「DAYS JAPAN」の元編集長でフォトジャーナリストの広河隆一氏が、性暴力やパワーハラスメントを告発された問題で、外部有識者で構成する「デイズジャパン検証委員会」による報告書の内容をうけて、声明を発表しました。



Information

Statement

【声明】
「デイズジャパン検証委員会」報告書を受けて



映像コンテンツ (YouTube チャンネル)

2019年10月よりYouTubeチャンネルを開設。取材報告や書籍紹介、社会問題の解説や評論、絵本の読み聞かせ、カルチャー発信に至るまで幅広く番組を制作しています。

【取材報告】Voice of People
『故郷を追われて』(クルド自治区)



【ニュースワード解説】Chiki's TALK
流言の仕組み～新型コロナウイルスの事例から～



Column

Dialogue for People 設立記念シンポジウム

『世界を「伝える」、未来を「考える」』



2019年11月10日(日)、弊会の設立記念シンポジウムを、聖心女子大学ブリット記念ホールにて開催いたしました。

「メディアで取り上げられない事柄の中にも、僕たちが学ぶべき、後世に伝えるべきことは必ずあるはずです。僕たちの目指す活動は、それらを具体的な誰かの身に起こった経験として持ち帰り、単なる情報ではなく『共有財産』として伝え届け、そして今日のような場を通じて、考えるきっかけを創出していくことです」。冒頭、代表理事の佐藤慧が団体設立の背景と目指していく活動のあり方をこう述べました。

続くパネルディスカッションは理事4名が登壇。副代表理事の安田菜津紀がモデレーターを務め、それぞれの「伝える」役割としての活動と、その中で考え、感じていることを共有しました。

ジャーナリストの堀潤は、世界に広がる『分断』にどう対峙するかについて、「今まで、『対話』の中から多様な価値観を探り出したいと活動してきました。しかしここ最近、世界の中で『分断』が深まっていると感じています。その正体は複雑で、とある勢力を倒せば解消するというわけでもない。その種は“人々の心の中”にあるんです。固定観念とイメージのはびこる社会から、自分たち自身で身を守るために、まずは自分の目で見て感じる小さなファクト(事実)を大事にすることが重要です」と述べました。

また、ミュージシャンのSUGIZOは、「現場で求められていること、そして自分がこの場で必要だと思うことに関しては、ある意味“歯車”になりたい

という思いがあります。相手が何を求めているのか？を考えない自己主張は、『対話』や人と繋がりとうとする時に足かせとなることが少なくないのではないのでしょうか」と語りました。

写真家・映画監督の石川梵は「僕らが目指しているのは人と人とをつなげること。作品等を通じて、漠然とした“誰か”ではなく、“あの人”に会いたい、困っているなら助けたい、と思ってもらえるような世界観を届けることです。こうした活動に参加することで、皆さんにはぜひ繋がりを見つけて欲しいと思います」と話しました。法学者の谷口真由美は、「例えば今日、心を打たれるものがあつたなら、大事なものを“隣のおばちゃん”に伝えることができるかどうか？ではないでしょうか。まずは『今日こんな話聞いてさ』と身近な人に話せるだけでも十分だと思います」と、できることから始めることの重要性を説きました。

最後に、安田が会を振り返り、こう締めくくりました。「この仕事をしてきて、写真の限界を感じることが度々あります。何枚シャッターを切っても、瓦礫が退けられるわけではないし、目の前の子どもたちの傷が癒えるわけでもない。でもそれは『役割分担』だと、出会った人たちから教えてもらいました。今日のこの場もその一環かもしれません。身近な人にお話いただき、そこから輪を広げていっていただければと思います」。

新たなスタートを切ったDialogue for People。今後もシンポジウムに限らず、様々な「対話」の機会を設けていきたいと考えています。

次世代とともに歩む - 若手発信者育成事業

「伝える仕事」に興味関心、そして意欲をもつ若い世代を発掘し、その活躍の場を広げ、サポートすることを目的としたプロジェクトを実施。2019年度は2つのスタディツアーを開催・協力しました。

東北スタディツアー（共催企画）

高校生が安田菜津紀とともに実際に東日本大震災の被災地を訪れ、写真撮影をしながら被災の状況や復興に向けた取組みについて学び、防災について考えるプログラム。2014年より、オリンパス株式会社とともに実施しています。

2019年は東日本大震災から8年が経過する中、震災当時は小学校低学年だった高校生10名が参加。各地を訪れる中で、それぞれの地域や出会った人々、そしてそこで頂いた言葉から感じたこと、考えたことを、写真とレポートにまとめました。



Outline

名称 第6回 フォトジャーナリスト安田菜津紀と行く東北スタディツアー
期間 2019年8月4日(日)～6日(火)
参加者 高校生10名
訪問先 福島県南相馬市(小高地区)、宮城県石巻市(大川小学校跡地)、岩手県陸前高田市各所
企画 オリンパス株式会社、NPO法人 Dialogue for People

Report

高校生のレポートはこちら



友情のレポーター（審査・現地取材同行）

安田菜津紀がフォトジャーナリストを志すきっかけにもなった本企画は、1995年より「NPO法人国境なき子どもたち」が開催しているプログラムで、2017年より安田も現地取材に同行するなど協力して事業を実施しています。

昨年は2名のレポーターとともにフィリピンを訪れ、青少年鑑別所や路上、スラム地域など、さまざまな境遇に生きる同世代の子どもたち取材。安田はレポーターと現地の子どもたちを対象に、写真ワークショップを実施しました。



Outline

名称 第33回 友情のレポーター（2019）
期間 2019年7月25日(木)～30日(火)
参加者 2名
訪問先 フィリピン
主催 認定NPO法人国境なき子どもたち (KnK)
協力 NPO法人 Dialogue for People
 株式会社 GARDEN

音楽は国境をこえて - その他の事業(1) BABAGANOUJプロジェクト

2016年、佐藤慧がミュージシャンのSUGIZO氏、斉藤亮平氏（NPO法人JIM-NET海外事業担当）とともに結成した、難民キャンプ等でライブ活動を行うバンド「BABAGANOUJ（ババガヌージュ）」。

2019年9月28日～10月10日の日程で、イラク、ヨルダンの各地を訪れ、ライブや現地での訪問活動を実施しました。

クラウドファンディングを通じて資金を集めたこの度のプロジェクトは、皆さんの思いを音楽に乗せて現地へ届けることができ、各地で大いに歓迎いただきました。また、現地での活動の様子はメディアにも多数取り上げられ、D4Pや協力団体の活動を広く知っていただく好機ともなりました。



©KEIKO TANABE

Information

Report

2019年のババガヌージュの活動(中東音楽交流事業)をまとめた報告書はこちら



被災地の今を伝える - その他の事業(2) 緊急人道支援事業

2019年10月に発災した台風19号について、災害支援経験のある事務局員1名が長野県穂保地区、福島県いわき市、栃木県佐野市をはじめ被災各地に赴き、現地の被害状況および支援概況取材し、レポートを執筆しました。また、東日本大震災の被災地では「東北スタディツアー」(PI5)の実施のほか、震災から8年を迎えた各地を訪問し、継続した取材活動を行っています。

どの被災地でも、「完全な終わりではなく、いまだ復興の途上にある」という言葉をよく耳にします。地域や出会った人々に寄り添い、その時々「被災地の今」をこれからも伝えていきたいと考えています。

Information

Report

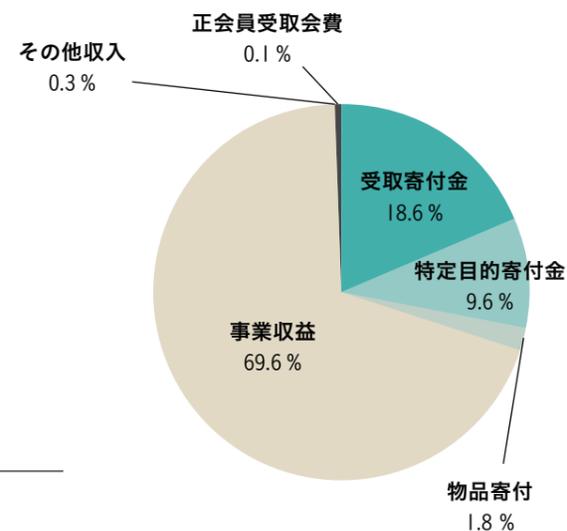
2019年10月の台風被害状況について、長野県穂保地区など取材したレポートはこちら



会計報告

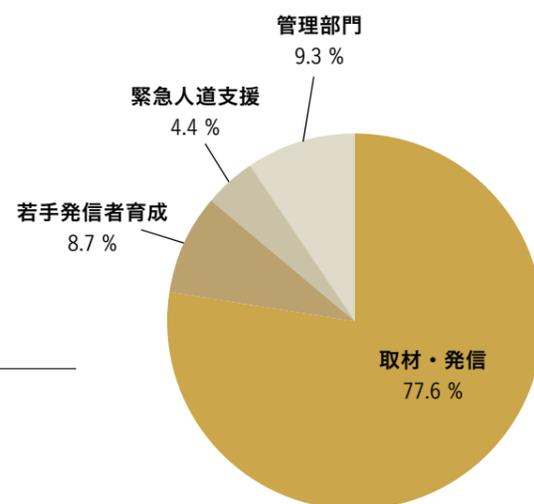
収入の部

項目	金額 (単位:円)
正会員受取会費	42,000
受取寄付金	6,357,012
特定目的寄付	3,274,712
物品寄付	596,923
事業収益	23,760,831
その他収入	115,662
合計	34,147,140



支出の部

項目	金額 (単位:円)
取材事業・発信事業	14,262,009
若手発信者育成事業	1,590,573
緊急人道支援事業	808,904
管理部門	1,715,853
合計	18,377,339



私共は、特定非営利活動促進法第18条に基づき、特定非営利活動法人 Dialogue for People の2019年5月22日から2020年1月31日までの第1期の業務監査及び会計監査を行ない、その結果、業務が適正に執行されており、会計について証拠書類及び関係書類は、記載すべき事項を正しく記載し、また支出すべて領収書等の証憑と合致していることを認め、ここに報告いたします。

2020年4月3日

監事

石井宏明



監事

潤間拓郎



※ 活動報告書および財務諸表の全体は Dialogue for People ウェブサイトにてご確認いただけます。 <https://d4p.world/about/>

組織概要

団体情報

名称	特定非営利活動法人 Dialogue for People (ダイアログ フォー ピープル)
所在地	〒165-0026 東京都中野区新井2-10-3 KSビル202
設立	2019年3月23日
法人格取得	2019年5月22日

役員一覧

代表理事	佐藤 慧 / D4P事務局員
副代表理事	安田 菜津紀 / D4P事務局員 中山 大輔 / D4P事務局員
理事	石川 梵 / 写真家・映画監督 在間 文康 / 弁護士 SUGIZO / ミュージシャン 谷口 真由美 / 法学者 堀 潤 / ジャーナリスト
監事	石井 宏明 / 団体職員 潤間 拓郎 / 行政書士

組織図



顧問

矢萩 邦彦 / 会社役員

Message from Supporters

マンスリーサポーターの声



若松英輔さん

現代人は、多くのことを知るの得意になった。しかし、それはすぐに忘れることともつながっている。混乱が多い時代のなかで、いま、私たちに必要なのはたくさんの方の情報にふれることではないだろう。信頼できる何かを、信頼できる人たちから受けとることだ。そうした意味でも Dialogue for People の活動には多くのものを期待している。



渡辺加代子さん

世界を良くするためには、まず、今この瞬間に起きていることを知らないことには何も始まらない。しかし意外に知らない、知らされないのが、そこにいる人たちの思い。人の顔が見え声の伝わる取材。感銘を受け、自分にできることはこんな事しかないけれど、と少しばかりの支援を始めました。次世代も育てられていて、素晴らしい方々です。



「伝える」を支えることから、世界とつながる

Dialogue for Peopleでは活動を支えてくださるマンスリー、ワンタイムサポーターを募集しています。皆様のあたたかなご寄付が活動の力になります。ご支援・ご協力よろしくお願いいたします。



「伝える」を「支える」ことから世界と「つながる」

国内外での取材、自主企画の運営、各種コンテンツ制作などのDialogue for Peopleの活動は、皆さまからのご寄付に支えられています。声なき声に耳を傾け、世界の「無関心」を「関心」に変える、伝える活動へのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

マンスリーサポーター募集中！単発寄付もごさいます。

ご寄付のお申し込みは
ウェブサイトから



活動の様子や新着記事掲載などおしらせ！

SNS随時更新中
フォローはこちらから

